

「長くて短い日曜日」

山田麗

○ 梗概

不良仲間である、関浩二（16）、真壁俊介（17）、室井剛（17）と一緒にいつも通りの日常を過ごすはずだった南海夕（16）は、その夜、血まみれで街を走る。公園で汚れたシャツを洗っていると、ふと、アパートの一室が目に入る。Tシャツを盗ろうと人目を気にしながらベランダによじ登る。部屋の中で氷を頬張っている都築みう（5）と目が合う。汚れた部屋と、扇風機だけが回る部屋。夕は、汗だくのみうを見て、彼女が置かれた状況を悟り、思わず一緒に行くかとみうに問うのだった。みうもそんな夕をみて、静かに頷くのだった。彼らなりに旅を始める。時には盗みをしたり、時には誰かのやさしさに触れ合いながら、二人は海を目指すことにする。夕は、不器用ながらもみうと接していく。まるで、今まで接してきたことがあるかのよう。みうもそんな夕に次第に心を許していくのだった。そんな中、二人の刑事、間宮零士

(30)と平陽一(27)はとある事件を調べることになる。家の中で、死んでいる親子。一人は父親の南海亮(45)、もう一人は娘の南海波音(5)。亮は腹部を何か所も刺され、波音は頭を打ちつけられ、土に埋められていた。零士はそんな二人の遺体を交互に見ながら頭を悩ませる。この家に住んでいたのはもう一人いることがわかる。それが亮の息子であり、夕である。陽一は二人を殺したの夕であると決めつけるが、納得のいかない零士は、夕の行き先を追うことにする・・・。

○ 登場人物

南海	都築	間宮	平	南海	南海	服部	関	真壁	室井	笹山	田辺	木場	佐藤
みなみ	つづき	まみや	たいら	みなみ	みなみ	ふくべ	せき	まかべ	むろい	さはやま	たなべ	きぼ	さとう
夕	みう	零士	陽一	波音	亮	幸子	浩司	俊介	剛	太一	誠	令	茂
ゆう	みう	れいじ	よういち	はのん	りょう	ゆきこ	こうじ	しゅんすけ	つよし	たいち	まこと	れい	しげる
(16)	(5)	(30)	(27)	(7)	(45)	(68)	(16)	(17)	(17)	(23)	(29)	(18)	(29)
不良少年	少女	刑事	零士の後輩、 刑事	夕の妹	夕の父	畑の所有者	夕の不良仲間	夕の不良仲間	夕の不良仲間	コンビニの店員	交番勤務、 警察官	町の不良	コンビニ店員。

○町並み

立ち並ぶ住宅街。

木に止まっている蝉がうるさく鳴いている。

公園では、子どもたちの遊ぶ声が聞こえる。

○町・土手

芝生に寝転んでいる、南海夕（16）。

着崩したシャツとズボン、金髪姿で、いかにも不良といった格好をしている。

その隣で寝転んでいる、関浩二（16）
派手なシャツのポケットから煙草を取り出す。

浩司「吸う？」

起き上がる夕。

夕「ああ」

浩司、ポケットからライターを取り、煙草と一緒に夕に渡す。

夕、煙草を一本取り出して、ライターで

火をつける。

夕、煙草を深く吸って吐いている。

煙草とライターを浩司に返す。

浩司も煙草に火をつけ、吸い始める。

そこに、真壁俊介（17）と室井剛（1

7）がやってくる。

俊介「よう、いいもん吸ってんじゃん」

剛「よっ」

俊介、剛に対して手をあげて反応する夕。

俊介、剛、夕の横に座り、煙草を吸い始める。

剛「なあ、佐野高のやつが6歳の女の子誘拐したって話知ってる？」

夕「なにそれ」

俊介「やっぱ、ロリコンかよ」

浩司「捕まったの？」

剛「さあ・・・？」

夕、ふーんと上の空で聞いている。

そこに自転車を漕ぎながらやってくる田

辺誠（29）。

誠 「おい、お前ら、またこんなところでこの前補導されたばかりだろ」
 渋々煙草を消し始める夕たち。

俊介 「だりい」

剛 「行こうぜ」

立ち上がり、その場から動き始める夕たち。

誠 「こら、まだ話終わってないぞ」
 説教をする誠をよそに、その場を後にする夕たち。

○同・商店街

横並びで歩いている夕、浩司、俊介、剛。
向かいからやってくる別の集団とぶつかる。

集団の一人、木場令（18）がにらみつけ、声を荒げる。

令 「おい！」

振り向く夕たち。

令 「ぶつかっておいて、謝らないのか」

夕、一步前に出て令を睨みつける。

夕 「今、俺は機嫌が悪いんだ」

令 「そんなのどうでもいいわ」

夕 「あっそ」

夕、素早い動きで拳を令の腹に入れる。

令、腹を抑えて座り込む。

令 「ぐっ……おい！（後ろの仲間
声をかけ）やれ！」

令の声で、他の数人が夕たちに向かつて

殴りかかる。

× × ×

倒れ込んでいる令とその仲間たち。

夕 「言っただろ、機嫌悪いって」

誇らしげにその場から歩き出す夕たち。

互いを称え合っている。

剛 「やるじゃん、俺ら」

俊介 「じゃあ、勝利の一杯やりますか？」

浩司 「いいな、夕も行くだろ」

夕 「ああ、もちろん」

夕の返答に盛り上がる浩司、俊介、剛。

○南海家・リビング

真っ赤な血に染まった両手を見つめてい
る夕。

だんだん息が荒くなっていく。

ゆっくりと顔を上げ、何か（父親の死体）
を見る。

○道中（早朝）

まだ薄暗い中を走っている夕。

シャツが血で汚れている。

パトカーの音が聞こえてくる。

足を止めずに走っていると、障害物に気

づかずぶつかって転んでしまう。

転んだ拍子に頭をぶつけ、気を失う。

× × ×

あたりが明るくなっている。

うるさく蝉が鳴いている。

夕、ゆっくり目を覚ます。

痛みで頭を押さえる。

夕 「いってえ・・・」

○公園（朝）

水道で汚れたシャツを洗っている夕。

血はなかなか落ちない。

汗をぬぐう夕。

あたりを見渡すと、アパートが目に入る。

一室だけ窓が開いている。

蛇口を止め、その部屋に向かって歩き出

す夕。

○アパート・ベランダ（朝）

竿に干されているシャツを見つめている

夕。

あたりを見渡し人がいないか確認する。

柵を登り、シャツを一枚とる。

部屋を覗くとゴミが散らばっていて汚い。

そこに一人の少女、都築みう（5）がや

ってくる。

みうは夕に気づかず、手に持ったコップ

に入っている氷をバリバリ食べている。
よく見ると、クーラーは付いておらず、
扇風機だけが回っている。
夕がベランダからそっと降りようとした
とき、部屋にいるみうと目が合う。
固まる夕。

しばらく見つめ合う二人。

夕、恐る恐る口を開く。

夕 「か、母ちゃんは？」

みう、首を振る。

夕 「じゃあ、父ちゃんは？」

みう、再び首を振る。

夕 「そう・・・」

夕、ベランダから降りようとするが、何かを考え込む。

そして、部屋に入っていく。

○同・リビング（朝）

ゆっくりみうに近づく夕。

しゃがみこみ、夕の目線に合わせる。

みう、汗をかき、シャツがだいぶ濡れている。

タ 「暑いか？」

みう、首を縦に振る。

タ 「着替えはある？」

みう、寝室にある箆笥を指さす。

タ 「自分で着替えできるか？」

みう、立ち上がり、寝室の方へと向かう。

タ、その間にクーラーのリモコンを探す。

あたりはゴミだらけで、足の踏み場がほとんどない。

たまに匂うので鼻をつまむタ。

ごみの下からリモコンを発掘する。

電源を入れ、クーラーを入れる。

タ 「まだ、電気は通ってるか」

冷蔵庫を開け中を見る。

冷蔵庫には食料はほぼない。

次に冷凍庫を開ける、

中にはケーキとかについてくる小さい保冷剤が数個入っているだけ。

夕、小さい保冷剤を取り出す。

周りにある中から比較的綺麗そうなタオルを取り出し、保冷剤をまく。

みうが着替えて戻ってくる。

それに気づく夕。

みうのシャツのボタンがずれていることに気づき、直してあげる。

首に保冷剤入りのタオルを巻く。

夕 「首のが冷たくなかったら、冷凍庫にある別のと交換するんだ。わかるか？」

みう、首を縦に振る。

夕 「じゃあ、できるな」

夕、その場を離れ、ベランダから再び出て行こうとする。

外では蝉がうるさく鳴いている。

夕、立ち止まり、名残惜しそうにする。

振り向き、みうの顔を見る。

みう、警戒心はなく、ただまっすぐに夕を見つめている。

夕 「俺と・・・行くか？」

みう、頷く。

○道中

夕が歩いている。

そのすぐ後ろをついて歩いているみう。

前から走ってくるパトカーに気づくと、

咄嗟に物影に隠れる夕。

真似をするように一緒に隠れるみう。

二人のお腹がなる。

夕 「こんな時でも腹はなるんだな」

夕、ズボンのポケットから小銭を取り出す。

小銭は三十円しかない。

夕、ため息をつく。

○コンビニ・店内

イトインスペースに座っているみう。

夕は商品を物色している。

おにぎり二つを手取る。

暇そうな店員、佐藤茂（29）の隙を見

計らってポケットに入れる。

次に、水を手に取り、服の下に隠す。

慣れた手つきである。

ジュース売り場を通り過ぎようとしたが、少し迷ってリングジュースを手に取る。

イトインスペースにいるみうに声をかける。

タ 「行くぞ」

みう、タについていく。

二人、店から足早に出て行く。

○神社

賽銭箱前に座り込みおにぎりを食べるタ、

みう。

ちょうど木陰になっていて涼しげである。

みう、リングジュースを両手で持ち飲み

始める。

その様子を少し微笑ましくみるタ。

タ 「お前・・・海見たことあるか？」

みう、首を振る。

タ 「じゃあ、行くか」

タ、立ち上がり、賽銭箱に手を伸ばす。
みうがその様子を見ていることに気づき
少し戸惑う。
手を伸ばすのを一旦やめ、両手を合わせ
る。

タ 「ごめんなさい」

タ、賽銭箱からお金を取り出す。

○道中

タが歩いている。

後ろからついてくるみう。

浩司がタを見つけ声をかける。

浩司 「あれ？ タじゃん。何してんのこんな
ところで」

少し焦った様子のタ。

タ 「いや・・・神社だとタバコ吸ってるの
ばれないなと思って・・・」

浩司 「おまえ、いつかバチあたんぞ」
苦笑いするタ。

浩司、タの少し後ろにいるみうに気づく。

浩司「あれ？ タの妹ってこんなに小さかつ

たっけ・・・？」

考え込む浩司。

タ「い、いや、親戚の子・・・」

浩司「親戚なんていたっけ？」

タ「まあ・・・」

浩司「あっそ。で？ どこいくの？」

タ「え？」

浩司「ついでに俺も行こうかと」

タ「なんで？」

浩司「たしかに、なんで？」

タ「しらねえよ」

少し表情が緩むタ。

浩司「よかった」

タ「え？」

浩司「なんか、思いつめてた顔してたから」

タ「そうか？」

浩司「ああ」

タ「・・・ありがとう」

浩司「おう」

夕、その場を離れようとする。

浩司「夕！」

夕、振り向き、浩司の方を見る。

浩司「なんかよくわかんねえけど、女の子は

泣かすなよ」

夕、その言葉を聞いてみうを見る。

みう、きょんとした顔で立っている。

夕「ああ」

意を決した顔で先に進む夕。

○南海家・リビング

血まみれの場所を鑑識が調べている。

床には夕の父、南海亮（45）が腹を数

か所刺され死んでいる。

そこに、刑事の間宮礼二（30）と後輩

刑事、平陽一（27）がやってくる。

亮の前に屈み、手を合わせる二人。

陽一が手帳を取り出し読み上げる。

陽一「被害者は南海亮45歳と娘の南海波音

6歳。南海亮は腹を数か所刺され、娘は頭部を打ちつけられたみたいです」

零士「ほかに家族は？」

陽一「今年十七になる息子がいます。ただ、問題児なようで、しょっちゅう補導されたり、喧嘩で警察沙汰になったり、散々のようです。もう決まりみたいなものですね」

零士「何が？」

陽一「え？ 息子が犯人で確定かなって」

零士「まだ決めつけるのは早いだろ。娘はどこで？」

陽一「あ、庭です」

零士、庭へと向かう。

陽一、その後ろをついていく。

○同・庭

夕の妹、南海波音（6）が頭を打ちつけられて死んでいる。

泥まみれでさっきまで土に埋まっていたことがわかる。

零士、波音の死体を見て考え込む。

陽一「南海亮は2年前に離婚、この家はロ
ンが払い終わっているようで、どうやら、
奥さんを出て行かせたようです。当時は羽
振りが良かったんでしょうけど、離婚後か
らはアルコール依存症に陥り、仕事に行か
ず、借金まみれで、娘息子、ともに学校に
は通っていません」

零士「それで、父親と娘は死んで、息子は
ないと・・・」

陽一「はい、まあ、むしろくしゃしてとかじ
やないすかね・・・鑑識によると、だいぶ
指紋が残っていたみたいなので、証拠が出
るのも時間の問題っすね」

零士、波音の頭の傷と、亮の腹の傷を交
互に見る。

考え込む零士。

○ 駅・改札前

線路図を見て悩んでいる主人公。

タ 「子供料金、大人料金・・・そういや、

お前、いくつ？」

みう、掌をめいっばい開いて見せる。

タ 「自分の年、わかるんだな」

タ、切符の機械に近づき、一番遠い駅の切符を買う。

○電車内

人が少なく、まばらに座っている。

電車が発車する音が鳴る。

タ、空いている席に座る。

みう、タの隣に座る。

電車が発車し始める。

× × ×

しばらく乗っているととうとうと眠くなってくるタ。

思わず眠ってしまう。

○南海家・リビング【夕回想】

テーブルの上で絵を描いている波音。

子供らしい絵である。

そこに夕がやってくる。

夕、波音が書いている途中の絵を手に取り
る。

夕 「なんだこれ」

波音 「もー、まだ描いてるの」

夕 「へたくそだな」

波音 「お兄ちゃんよりましだもん」

夕 「は？ 俺の方がうまいからな」

波音 「じゃあ、描いてよ」

夕、テーブルの上にあるクレヨンを手
取り波音と同じ絵を描く。

波音 「お兄ちゃんも下手じゃん！」

夕 「おま・・・！ うるせえぞ」

夕、波音の脇をくすぐる。

波音、げらげら笑う。

波音 「だって」

楽しそうな二人。

インターホンが鳴る。

笑うのを一瞬にしてやめる二人。

ドアを叩く音。

夕の背中に隠れる波音。

夕 「押し入れ、入っとけ」

波音、寝室の押し入れへと向かう。

夕、玄関へと向かう。

○同・玄関【夕回想】

恐る恐るドアに近づく夕。

夕 「・・・はい」

配達員 「あ、宅急便でーっす」

ほっとした表情の夕。

後ろを振り向くと波音が心配そうに覗いている。

波音に向かってほほ笑む夕

夕 「宅急便」

波音、笑顔になる。

○同・リビング【夕回想】

テーブルの上で絵を描いている波音。

海の絵を描いている。

玄関が開く音がする。

咄嗟にテーブルの下に隠れる波音。

傷だらけの夕がテーブルの下を覗く。

夕 「そこじゃなくて、押し入れに行けって
いつも言ってるだろうが」

波音 「押し入れ、怖いんだもん……」

夕、はあっとため息をつく夕。

波音、夕の傷に気づく。

波音 「また、喧嘩した？」

波音、テーブルの下から出てくる。

夕 「いいだろ、別に」

夕、波音の描いている絵を見る。

夕 「海……？」

波音 「そーう！ この前テレビでねすっごい
綺麗な海が映ってたの！」

夕 「ふーん」

波音 「はのん、海、みたことない」

夕 「あれ、そうだったけ？」

波音 「そうだよ……」

少し、落ち込んだ表情の波音。

夕 「でも、こつから一番近い海なんてきつたねえ海しかねえぞ」

波音 「そうなの？」

夕 「ああ、ゴミとか浮いてる」

波音 「うええ・・・」

夕 「残念だったな」

夕、その場を離れようとする。

波音 「でも、きつときれいなんだろうなあ」

夕、首をかしげる。

夕 「きたねえって」

波音 「きれいなもの！」

ほっぺをぷくつとさせて起こる波音。

○電車内

ガタンという大きな揺れで起きる夕。

電車が停車する。

窓から外を見ると山ばかり。

夕、ため息をつく。

みうが夕の体に寄りかかりながら寝ている。

夕、みうを起こす。

夕 「おい、降りるぞ」

○ 駅・改札前（夕方）

改札から出てくる夕とみう。

夕があたりを見渡すと、山ばかりである。

夕 「山側に来ちまった・・・」

とりあえず歩き出す夕とみう。

○ 車内

運転席でおにぎりを頬張っている陽一。

そこに零士が助手席に乗り込んでくる。

おにぎりを食べながら零士に挨拶する陽

一。

陽一 「あ、おふかれさまっふ（おつかれさま

っす）」

ため息をつく零士。

零士 「鑑定の結果は？」

陽一 「あ、」

慌ててポケットからメモ帳を取り出す陽

一。

メモを落としそうになり、零士に拾われる。

零士に軽く頭を下げる陽一。

零士「まったく・・・（まったく）」

メモをみる零士。

陽一「被害者以外で指紋は南海夕のだけでした。その夜、血まみれのシャツで走っている彼を見たという目撃情報もあります。確定ですね」

零士「そうか・・・」

納得のいかない様子の零士。

陽一「一体何が引っかかるんです？」

零士「いや・・・俺は信じただけだよ」

陽一「何を・・・？」

零士「この仕事をしてると、信じてやれなかったことが山ほどあるからな」

陽一、首をかしげる。

零士「わからなくていい、こんなことは、行くぞ」

陽一「は、はい」

シートベルトを閉め、車を発進させる

陽一。

○道中（夕方）

夕が前をあるき、後ろからみうがついてきている。

みうが何かに気づき、足を止める。

ふと後ろを振り向く夕。

みうに気づく。

夕「おい、なにしてんだよ」

みう、動かず何かをじっと見つめている。

夕、しかたなくみうに近づいていく。

みうの目線の先にはアスファルトに花が咲いている。

夕「・・・お前、花好きなのか？」

何も答えないみう。

夕「なんだよ・・・」

花の近くでたくさんの蟻が大きい虫を運ぼうとしている。

少し、引いた目で見る夕。

夕 「まさか、虫が好きなのか・・・」

みう、じっとその様子を見ている。

夕 「いいよな、たくさん仲間がいて・・・」

みう、顔をあげて夕の顔を見る。

夕 「一人じゃできない」

たくさんさんの蟻がついに大きい虫を運び始める。

夕 「俺達には無理だ」

ヒグラシの声が聞こえ始める。

夕 「いくぞ・・・」

夕、その場を後にする。

みう、ゆっくり立ち上がり夕の後をついていく。

× × ×

あたりは畑だらけ。

夕が前を歩き、後ろからみうがついてきている。

しばらくすると、みうがしゃがみ込んでしまう。

夕、それに気づいて声をかける。

夕 「おい、早くしないと、夜になっちまう

だろ」

しゃがみ込んだままのみう。

夕、再び歩きだそうとするが、立ち止まり、考える。

振り向き、みうに向かって歩き出す。

しゃがみ込み、みうに背中を向ける夕。

夕 「ん」

おんぶを促す夕。

みう、夕の背中に乗る。

夕、みうをおんぶして歩き出す。

切ない表情をする夕。

× × ×

歩いていると、ふとトマト畑が目に入る。

畑に向かって歩き出す夕。

○畑（夕方）

みうを降ろす夕。

トマトをとろうとするが少し躊躇する。

みうのお腹が鳴る。

仕方なくトマトをとり、みうに渡す。

夕 「たぶんうまい」

みう、トマトを受け取り、ほおばる。

夕も自分の分のトマトをとり、食べ始める。

ふと、トマトの断面が目に入る夕。

× × ×

フラッシュイン

真っ赤な血に染まった両手

× × ×

思わず吐いてしまう夕。

近くで服部幸子（68）の声が聞こえてくる。

幸子 「そこにいるのは誰だい？」

慌ててポケットに入れてあった折り畳み

ナイフを取り出す夕。

幸子がゆっくりやってくる。

幸子、トマトを食べるみうと、ナイフを出そうとしている夕が目に入る。

幸子「あらあら」

夕、ナイフを突き出す。

夕「こいつがお腹を空かせてて……許してくれ」

幸子、物怖じせず、にこりと笑い、みうに話しかける。

幸子「おいしいかい？」

みう、頷く。

幸子「そうかそうか」

幸子、夕の顔を見る。

夕、ナイフを握り直す。

幸子「うちに来なさい」

驚く夕。

夕「え……」

幸子、二人に背を向け歩き出す。

夕、ナイフをしまい、戸惑う。

○服部家・玄関

靴を脱ぐ夕。

隣でみうが靴を脱ぐのに苦戦している。

仕方なく手伝う夕。

靴を脱がすと、足が泥と靴ずれした血で汚れている。

その足を無言で見つめる夕。

幸子がやってくる。

汚れている二人を見る。

幸子「まずはお風呂だね」

○同・脱衣所

お風呂の前で突っ立っているみう。

うーむと悩んでいる様子の夕。

夕「さすがに一緒に入るのはまずいので

は・・・」

夕「お前、一人で入れる？」

首を振るみう。

ため息をつく夕。

夕「だよな・・・」

渋々みうの服を脱がす夕。

みうの体にあざがたくさんあるのに気づく。

何も言わない夕。

黙ってみうの服を脱がす。

○同・風呂

お風呂に入っているみう。

服を着たまま風呂の淵に座っている夕。

夕 「もういいだろ、十数えようぜ」

首を振るみう。

夕 「入ってないのに俺がのぼせそうなんだ

けど・・・」

みう、夕の腕のあざに気づく。

あざをじっと見つめているみう。

その様子に気づく夕。

腕をまくり肩まで見せる夕。

夕の腕もあざだらけである。

夕 「お揃いだな」

みう、首をかしげる。

夕 「一緒ってこと」

○同・居間

夕、みうの髪をタオルで拭いている。

みうの目線の先ではテレビがあり、アニメが映し出されてる。

くぎ付けで見ているみう。

そこに幸子がきて、テーブルに料理を並べていく。

夕とみう、近づき料理を見る。

豪華な料理たち。

夕 「すげえ・・・」

幸子 「たくさんお食べ」

夕、急いで箸を持ち食べようとするが、

我に返り、みうを見る。

手を合わせる夕。

夕 「いただきます」

料理を食べだす夕。

みう、夕の真似をして手を合わせてから食べ始める。

食べている二人を微笑ましくみる幸子。

二人が食べているとテレビでニュースが流れる。

南海家のニュースが流れている。

それを見ている夕。

幸子に恐る恐る問いかける。

夕 「・・・なんで、何も聞かないんだ？」

幸子、にこりと笑う。

幸子 「理由がなきゃ、ご馳走しちゃダメか

い？」

夕 「い、いや・・・」

夕、後ろにある仏壇が目に入る。

仏壇にはお爺さんの写真と若い男の写真。

○同・寝室（夜）

布団を敷いている幸子。

それを横で眺めている夕とみう。

幸子が布団を広げようとすると、夕が近

づき、幸子から布団をもらう。

夕 「やる」

幸子 「おや、そうかい、じゃあお願いね」

布団を敷いている夕。

× × ×

布団に入って寝ているみう。

ゆう、布団に入って横になっているが、

何かを考えている。

起き上がり、みうを起こす。

タ 「行こう（小声で）」

○同・玄関（夜）

靴を履いてそっと出て行こうとするタと
みう。

タ、靴箱の上にあるお金と紙を見つける。
紙には『少しだけど、良かったら使って
ください』と書かれている。

タ、その紙をじっと見つめている。

みうの方を見る。

タ 「ちよっと、待ってて」

タ、靴を脱ぎ、居間へと向かう。

○同・居間（夜）

タ、テーブルの上に書置きを残す。

書置きには『ごちそうさまでした』の文字。

○コンビニ・店内（早朝）

茂が慌てた様子で話している。

茂 「万引きっすよ、万引き。店長に知られたらやばいっすよ・・・」

その話を聞いている零士と陽一。

陽一メモを取っている。

零士 「わかったから、その少年の特徴は？」

茂 「えっと・・・。金髪で背が高くて。

あ！ 子供連れてましたわ、女の子！」

零士、眉毛をびくっと上げる。

陽一 「女の子？」

茂 「はい、幼稚園くらいの子かな」

零士 「どんな様子だった？」

茂 「えー、普通っす。女の子はそいつについて歩いてたっす」

腕を組み考える零士。

陽一、零士に耳打ちする。

陽一「もしかして、殺人の次は誘拐ですか

ね？」

零士「強引に連れてる様子はなかったんだろ」

陽一「そうですけど・・・」

うーんと考え込む陽一。

零士「間に合うといいが・・・（ボソツと）」

陽一「なんすか？」

零士と陽一、コンビニを出る。

○同・駐車場・車内（早朝）

車に乗り込む零士と陽一。

陽一「どこ行ったんすかね・・・？ 女の子

連れて・・・」

はあっとため息をつく零士。

零士「おまえ・・・それでも刑事か・・・」

陽一「へ・・・？」

零士「歳、妹と変わらないくらいだろ」

陽一「・・・だから？」

零士「償いだよ」

ぽかーんとしている陽一。

あきれた顔でシートベルトを締める零士。

零士「行くぞ」

陽一「は、はい」

急いでシートベルトを締め、車を走らせる陽一。

○服部家・玄関

インターホンを押す陽一。

その後ろに零士がいる。

幸子が出てくる。

幸子「はいはい」

陽一、警察手帳を由紀子に見せる。

陽一「警察なんですけど・・・事件に関与しているとみられる少年がこちら辺を通ったみたいなんですよ、何か知らないですか？」

幸子「さあねえ？　こんな田舎に若いもんが来るかね？」

陽一「そうですか・・・」

陽一、諦めた様子で帰ろうとする。

零士、一歩前に出て幸子に話しかける。

零士「ここに来る途中にね、立派なトマト畑
あったでしょう？ あれ、服部さんちの？」

幸子「ああ、そうだね」

零士「小さい子供の足跡があったんだけど、

何か知らないですか？」

幸子、表情を変えずに答える。

幸子「さあ・・・？ 座敷童でもきたんかな」

おしとやかに笑う幸子。

零士「そうですか、ありがとうございます。

なにか思い出したらここに」

零士、幸子に電話番号を渡す。

幸子「はいはい」

零士、陽一その場を離れようとする。

幸子、電話番号をみて思い出したように

話し出す。

幸子「ああ・・・！ 零士さん、あの時

の・・・」

振り向く陽一。

零士「・・・覚えてましたか」

幸子「ええ、ええ、もちろん。その節は息

子がお世話になりました」

零士「いや、俺は何も・・・」

幸子「いいえ、言ってみましたから」

零士「・・・何をですか？」

幸子「零士君は最後まで信じてくれたって
拳を握りしめる零士。」

零士「いえ、僕は逃げましたよ」

につこり微笑む幸子。

その様子をわけもわからず見ている陽

一。

零士「では・・・」

再び歩きだす零士と陽一。

幸子「あのね、うちには17になる息子が
いてね、さぞいい子だったのよ」

足を止める零士。

振り向き、幸子を見る。

幸子「・・・いい子だったのよ」

幸子のまなざしに答えるかのように頷
く零士。

陽一、わけもわからず頷いておく。

その場を離れる零士、陽一。

幸子、空に祈る。

○道中

零士、陽一横並びで歩いている。

気まずそうにしている陽一。

それを察する零士。

零士「なんだ、めんどくさい。気になるなら

聞けよ」

陽一「き、聞けないっすよ・・・」

零士「高校時代の友人の母親だった」

陽一「えっ！ あの奥さん？」

零士「ああ。もう、友人はいないけどな」

陽一「え・・・」

しばらく黙る二人。

零士「信じてやれなかった結果だ」

陽一「だから・・・」

零士「ああ」

陽一「じゃあ、彼は・・・？」

零士「・・・急ぐぞ」

零士、陽一、道なりを足早に歩いていく。

○電車内

横並びで座っている夕とみう。

みうが後ろを振り返ると、窓から海が見えてくる。

思わず体ごと窓の方に向けろみう。

不思議そうに海を見つめている。

その様子をせつなそうに見る夕。

○海辺

横並びで砂浜に歩いてくる夕、みう。

みうが走り出し、波打ち際で遊び始める。

夕、砂浜に座り込み、みうを見つめている。

みうが砂で絵を描き始める。

その様子を見て、立ち上がる夕。

みうに近づく。

みうの絵をみる夕。

なかなかうまい絵を描くみう。

タ 「お前、絵、うまいんだな」

みう、顔を上げ、タを見つめる。

みう「・・・みう、みうっていうの」

初めてみうの声を聞いて驚くタ。

タ 「おま、（お前と言いかける）みう、喋れたのか」

みう、大きく頷く。

タ 「じゃあ、今度、俺の絵描いてくれ」

みう「うん」

波の音が大きくなる。

みうの描いた絵が波で消える。

再び描きだすみう。

水平線を見つめているタ。

× × ×

フラッシュイン

波音 「お兄ちゃんも下手じゃん！」

タ 「おま・・・！ うるせえぞ」

タ、波音の脇をくすぐる。

波音、げらげら笑う。

× × ×

フラッシュイン

波音「でも、きつときれいなんだろうなあ」

× × ×

タ、静かに涙を流す。

パトカーの音が近づいてくる。

タ、涙を拭い、ポケットから折り畳みナ

イフを取り出す。

みうを立たせる。

タ、みうに視線を合わせる。

タ 「ごめん」

みう、きよとんとした顔をしている。

みうの手を引いて、パトカーの方へ向か

う。

× × ×

パトカーが止まり、数人の警察官と零士

と陽一が降りてくる。

タとみう、歩いてくる。

零士「南海タくんだね？」

タ、みうの手を放し、突き飛ばす。

みう、突き飛ばされた衝撃で転ぶ。

そこに一人の警官がやってきて保護する。
夕、自分の喉にナイフを当てる。

零士含む警察官たちが警戒態勢に入る。

陽一「や、やめるんだ……！」

夕のナイフを持つ手が震えている。

それに気づく零士。

零士「君のせいじゃない」

陽一、状況が理解できず、え？という顔を
をする。

夕、今にも泣きだしそうな顔で、零士の
顔を見つめている。

零士「君は悪くない」

零士、夕の目をまっすぐに見つめている。

○南海家・リビング【夕回想】

床に倒れ込む夕。

亮が何度も夕の腹に蹴りを入れる。

亮「あ？　なんだってんだよ、まったくよ！」

夕、抵抗せずじっと耐えている。

気が済んだ亮は、ソファに座り酒を飲み始める。

ゲホゲホ吐きそうに咳込む夕。

うずくまったまま、亮を睨んでいる。

その様子を少し離れた場所で見つめる波音。

○同・玄関【夕回想】

靴を履いて出て行くようとしている夕。

そこに波音がやってくる。

波音「お兄ちゃん、どこ行くの？」

夕、そっけない対応をする。

夕「・・・どこだっていいだろ」

波音「波音も連れてって」

夕、振り返り波音の顔を見る。

波音、笑顔で夕を見つめている。

夕、奥にいる亮の背中に視線を向ける。

亮、ガハハと笑いながらテレビを見ている。

その様子を睨みつける夕。

夕、立ち上がる。

夕 「また今度な」

ドアを開け出て行く夕。

閉まりかけるドアの向こうで、せつなそ
うに見送る波音。

波音 「いってらっしゃい……」

○同・リビング【夕回想】

玄関扉が開く音がして、夕が入ってくる。

夕、何かを（波音の死体）見て固まる。

夕の目線の先には波音が床に倒れている。

波音、頭から血を流している。

夕、波音に駆け寄る。

夕 「おい！ どうしたんだよ！ しっか
り……」

夕、波音を抱き上げるが、体が冷たいこ
とを悟る。

後ろでは静かに酒を飲みながらテレビを
見ている亮。

夕、怒りを押し殺しながら亮に問いかける。

夕 「なにしたんだよ……」

亮振り向かずテレビを見たまま話し始める。

亮 「ああ、ちょっと押したら動かなくなっ
た」

夕 「どうということだよ？」

亮 「どうだっていいだろ、もう。それ、ど
っかに埋めて来いよ」

夕 「は……？」

夕、波音の体をぎゅっとつかみ、しばらく固まっている。

波音の服のポケットからクレヨンが落ちる。

夕、波音の体をそっと床に置く。
立ち上がり、キッチンにある包丁を手
取る。

我を忘れて歩き出す夕。
亮に向かって包丁を振り上げる。

包丁が亮の背中に刺さる。

亮 「あああっ！」

亮、咄嗟に夕から離れ、逃げようとする。

亮 「な、にす、んだよおめえ……」

夕、隙を与えず亮に再び包丁を刺す。

亮、床に倒れ込み苦しみだす。

夕、亮に馬乗りになり、ひたすら腹を何度も刺す。

亮の血が夕の顔や体にはねる。

○南海家・庭【夕回想】

血まみれの夕。

穴を掘っている。

× × ×

夕、波音を抱き上げ、優しく埋めてあげる。

夕 「ごめんね、ごめんね、ごめんね……」

○海辺

夕、ナイフを握り直す。

夕 「あの時行かなければ・・・！」

零士、少しずつ夕に近づく。

零士 「大丈夫、わかってるから。妹のためだ
ったんだろ？」

夕、少し離れた場所にいるみうが視界に
入る。

零士、手が届きそうな範囲まで夕に近づ
いていく。

零士 「そんなことしても、妹さんは喜ばない」
夕、みうの顔を見て涙を流している。

みう、じっと夕の顔を見ている。

零士、そっと夕のナイフの持っている手
に触れる。

少しずつナイフを持っている手が緩んで
いく。

零士、ナイフを受け取る。

膝から崩れ落ちる夕。

夕 「違う・・・俺のためだ・・・」

嗚咽を漏らす夕。

× × ×

パトカーに乗り込もうとする夕。

みうが駆け寄ってくる。

みう「お兄ちゃん」

振り返る夕。

少し笑顔を浮かべるみう。

みう「海、綺麗だったね？」

はっとした表情の夕。

みうの顔を見て優しく頷く。

そのあと空を見あげ、深く深呼吸する。

○車内

パトカーが走り出す。

夕が後ろを振り向くと、みうが見つめて
いる。

みうがだんだんと遠くなっていく。

夕、視線を前に戻し、零士に話しかける。

夕「あの子を、助けてください」

零士、真剣な顔で答える。

零士「ああ」

パトカーが海沿いを走っていく。

○留置所・一室

座り込んでいる夕。

そこに一通の手紙が届く。

封筒には汚い字で『お兄ちゃんへ』と書

かれている。

手紙を広げる夕。

何か（夕の似顔絵）を見てほほ笑む夕。

窓から光が差し込んでくる。

（終）